

由美子と火事

峠
みろし

春晴い夜の 野の中

一つ屋の火事は 何と美しいいものだろう

それは華やかな人の心の内側に ほろり 小い安を貝

せと怒心深心静に装束だ。又 吾儿左の素朴

ち、は石むりの響宴だ。

今、野の中はつんと建つと一つの倉庫が

燃えあがり、明も「焔」の姿は、交んではほ

い山、ほい山は踏み 踏みつてはうの上

り 火 強烈に炎うは眼の中は飛ん込んでか

心は刺刺す。 新月

淡々たる煙の柱は、何知迄も高く昇つて

の織の交り舟を隠さうとす。やうだ。

思ひやりある人々の 空 妙に浮立つるがゆめを

か、遠慮かたうな囁き 空 環しるがう、草の眠り

をまははせて、そこ 火 知れず走り過す

焔の中明もさか強く反ると 困む人影が野の園

送り 火 原の海に舟を、自働車か二つの川をい

か、浮着つて自信を示しあう 火 ういトと揚

北煙の帯が三本、四本、みぶりのしちかゝ火
の中心突入する、

目の序の焔が甲で燦々たる柱を
光るまゝに烈しく中水動く、

あゝ半暗の闇の静寂は、
~~あゝ半暗の闇の静寂は、~~

あゝ、生暗い闇の静寂に突つ立つて
をみつりておると由美子よ、
知しはあかす

思ひ出す、
地上と
月と星の在りての向の
思ひ出す

濃くあうるや深くなる、
つれづれ人の心を吐息させよ
あゝ白銀の煙の作

は、近々と居て抱き慰む
あゝ髪ほの暗い髪の中
たまよみ入つて

しの穂の指先が次々に
増しつゝ、中々善い
あゝのあはれ

を呼ぶ返す、
あゝその煙を追つて
立ちあがり火の跡は、

暗い髪が森林で
あゝのあはれ
あゝのあはれ

あゝ烈しいわう、
あゝのあはれ

煙を香しやう 向ふに黒くうかきまゝ山の高は
しや心定うら 勤まぬ若しい互の情懸り影
しや心定うら
認めぬわが心は中かぬ

喜も石く撃脚に 縮んたは又かうみ合ふ

かゝみ合つてはりの上り 執心正盛りにてす

焔の群は 見つりて 知しり心正盛りにて

奪させ ちどあしかうせ 所かかう 力 作の

府のう狂り上り力の口を成りぬはるうら

くすせり時 小と 自鼻口 類をたて 通じ豊醸る微風

は ちりま ちりま ちりま ちりま ちりま ちりま

自のう情熱に堪え切れず 恥羞に極を灼する

かゝり 切らぬに 濃うしては ちりま 吐き 吐

知しり 靈眼 ちりま 吐き 息をう

ちりま 吐き 息をう

あゝ 酔の園一杯に豊醸る香りの流れ

あれは倉庫の中は 積みたくわへしれは葡萄酒

の樽の 燥きすうら ちりま 吐き 息をう

片の右の ちりま 吐き 息をう

眼くちりま 朱金 粉 思ひまきり 撒きちりま

火の強り 煙の深さ ちりま 吐き 息をう

で、喰ひちのつゝ、ぬを断原の何時の肉にかひつ
たり合つて

あ、今宵私は再び清新な空の歌の甲が、身を
顔ほせ、由美子よ、お前と邂逅する日を！

由美子よ！

由美子よ！

あ、^あやアほりお前は新しのもうな

お前は新しのもうな！

お、う、叶わぬか、う、新しはお前を心の中一杯に

かき抱おく！

(22.2.26)